

2021 年度 学校自己評価報告書(法政大学第二中・高等学校)

教育理念・目標	<p>教育理念:本校における教育は、人格の完成をめざして国民的共通教養の基礎を築き、平和で民主的な国家および社会の形成者を育成することを目的とする。</p> <p>教育目標①: 人類および民族のあらゆる分野における歴史的・文化的遺産を体系的に学び取り、自然と社会・人間に対する認識を深める。</p> <p>教育目標②: 獲得した認識を総合し、自然との共生・諸民族の共同など、人類社会のもつ諸課題と向き合う視野を培う。</p> <p>教育目標③: 学ぶことの意味と喜びを知り、常に学問的好奇心を発揮し、生涯にわたって成長を遂げることのできる土台を獲得する。</p> <p>教育目標④: 自己を客観視し、社会の中でどのように生きるかを考える能力をつける。</p> <p>教育目標⑤: 自己の諸課題の解決・現状の変革を担おうとする自主的精神と互いを尊重し共同での取り組みができる自治的能力を獲得する。</p> <p>教育目標⑥: 高い品性と社会性を身につけ、不正・腐敗を許さず、社会正義を確立する自立の力を獲得する。</p>
---------	---

重点目標	<p>1、教育目標を達成するために生徒一人一人に高い学力をつけさせるための具体的実践の研究をする。</p> <p>2、男女共学化 6 年目に際し、新たに表出する課題に対して対応する。</p> <p>3、新図書館やICTを活用した教育の研究と実践を深める。</p> <p>4、中高 6 ヶ年を視野に入れた生徒の自主活動を伸ばすための工夫をする。</p> <p>5、法政大学・育友会(PTA)・同窓会・地域との連携を強化する。</p>
------	---

共通課題

No.	評価基準	学校自己評価				学校関係者評価
		年度目標		年度評価		実施日2022年7月1日
		現状と課題	具体的な取組	達成状況	次年度への課題と改善策	学校関係者からの要望、評価等
1	建学の精神 (建学の精神や理念の理解と意識化)	20 年度に続き、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を大きく受けた一年となった。建学の精神や理念については、例年中高 1 年生で重点的に行っている。感染症感染拡大の影響により、中学 1 年生の「校外授業」は中止、高校 1 年生の「新入生合宿」は大幅に縮小しての実施と時間に限りがあったが、可能な限り「学びのつながり」等を使用し建学の理念、大学史、二中高史等の学習を行った。				中高新入生に対し、校外授業・新入生合宿を通じて建学の精神の学習ができたことを評価する。次年度の課題を記載してほしい
2	組織運営	コロナ禍の下でも本校の重視する組織的・集団的な学校運営を進めるための工夫をおこなった。特に感染状況が厳しい時期においては、遠隔ビデオシステムなどを活用し教員間の打ちあわせや会議を保証した。他方、広い会場(木月ホール)を活用し感染予防を徹底しながら、可能な限り対面での教員会議を行うことを追求した。				コロナ禍での会議運営は評価する。遠隔システムによる組織運根の達成状況や課題を明らかにしてほしい。
3	教育活動 (教科、生活、進路、行事、自主活動等)	教科教育においては、学校改革の一環として、「教科教育における 6 力年体系化」の中長期計画に基づき、カリキュラム改革をおこなった。中学新教育課程が 2021 年度から実施、高校新教育課程が 2022 年度から実施となっている。新型コロナウイルス感染拡大のなかで、短縮授業や休講措置などがとられたが、オンラインでの学習指導を実施し、対面授業と連動するかたちで学習内容の精選・体系化をすすめた。学習方法についても、感染症対策を徹底しながら活動型の学習を位置づけ、他者と協働しながら思考力・表現力を培う実践を進めた。学力向上に資するカリキュラムの再構築と実践を展開し、学力の到達状況に応じて特別指導や課題設定などの学習支援を継続した。こうした取り組みを通して、法政大学推薦に値する学力へ到達させることに努めた結果、各教科目の学力到達度、および法政大学への推薦率について前年度の水準を維持することができた。来年度も、学校コンセプトである「調べ、討論し、発表する」教科活動の一層の充実に向け、ICT 機器の活用や学習情報センターとしての図書館を活用した教科活動を推進する。生活指導においては、共学化 6 年目を迎え、「新しい学校」としての生徒実態の把握に努めた。女子の制服としてスラックスを導入し、学校生活のルールを明確化して、生徒への周知徹底に努めた。新型コロナウイルス感染拡大のなかで、オンライン授業・短縮授業などが学校活動の展開として取り組まれた。その段階毎に HR やクラブ活動など取り組む内容を検討し、感染対策を施しながらできるだけ対面での取り組みを工夫して対応してきた。共学化での 6 年目のクラブ活動においては、改善課題の把握と環境整備に重点を置いた。新型コロナ禍での宿泊行事については、その都度実施の可否を判断してきた。延期や目的地変更、形態変更などを行い宿泊行事を				コロナ禍での教育活動、困難を極めながらも行い得たことを評価する。今後は定量評価も進められると良いのではないかと。またあきらまなかった課題を記載してほしい。

		実施とする判断となった。それぞれの学年の取り組みとして重視してきた、行事実施とともに学年集団を成長させる手立てとしてきた本校の生活指導の展開については、感染対策を行いつつ取り組みを行う展開となった。今年度は2学期に、中学・高校ともに木月ホールにて文化祭、二高祭を行い、各クラスの企画発表を行った。このような形態ではあるがの行事を実施して、クラス結集、学年結集に努めた。	
4	安全・保健管理 (保健、安全、防災、施設等)	年度当初(4月)に定期健康診断・体力測定(20年度は中止)を感染症対策を講じながら実施した。健康安全講習会については7月に生徒・教員ともに実施した。熱中症対策やAEDの使用法を含む心肺蘇生法や救急法についての学習を行った。また、こころの問題に対処する体制を整えるために年間をとおして(オンライン授業中も含む)カウンセリングループを開室した。生徒、保護者と必要な連携が取れる体制をつくり、年間を通して維持できた。避難訓練については、「火災時の避難経路の確認」「大規模地震発生時の対応」に関わって合計2回実施した(例年3回行っているがオンライン授業中の1回は中止)。避難時の注意事項の確認・徹底も行き、整然と実施することができた。次年度も継続して大規模地震発生時の対応について検討を深めたい。	健康安全講習会の実施などコロナ禍におい手も生徒の安全管理と健康に対して様々なことを実施した。課題を明確にしてほしい。
5	連携 (保護者、卒業生、地域等)	感染症感染拡大の影響を大きく受けたが、育友会(PTA)との連携を密に行い育友会理事会の円滑な運営に寄与した。「育友会集中ミーティング」においては、学校と保護者の充実した意見交流が行うことができた。日常的な保護者連携としては、3回(7月・12月・3月)の保護者会やクラブ保護者会を軸に、クラス担任、養護教諭、カウンセラーを中心に、各学年がチームとなって生徒個々の実態把握と対応を行った。同窓会との連携については、19年度から始まった同窓会内部の問題がおさまらず、まったく連携をとることはできなかった。22年度以降は新たな連携方法を追求する必要がある。地域等との連携では、「地域に愛される法政二中高」をめざし、地域の方々からお寄せいただく各種ご意見への対応につとめた。武蔵小杉駅近辺の清掃にも参加した。22年度は社会状況にもよるが、感染症感染拡大前までに参加していた地域清掃、地域のお祭りの吹奏楽部の参加、二中文化祭・二高祭の商店街の出店等、できる限りの参加を追求し、地域との良好な関係を構築したい。	コロナ禍においてもさまざまな事を行った事を評価する。変わった点を明らかにして、課題を明確にしてほしい。
6	大学との連携	法政大学とは、大学に設置されている付属校連携室を基点に連携事業を進めている。「法政大学憲章を学ぶための付属校生むけ教材開発プロジェクト」による冊子『学びのつながり』を高校1年の新入生合宿やホームルームで配布・活用している。内容は、法政大学が掲げる「自由を生き抜く実践知」にもとづき、①法政大学の理念、②法政大学の歴史(大学憲章への道)、③「地球社会の課題」とは何か、④中高生の「実践知」から構成されている。高校1年生では、3学期に「キャリアについて考える」ことをテーマに、法政大学の大学生や卒業生(社会人)による進路講演会を実施し、高校での生活や将来の職業について考える機会を持った。また、文理選択適性検査を実施し、将来の進路選択の動機付けを行った。高校2年生では、「ウェルカム・フェスタ」を実施し、法政大学教員による全体講演「大学と高校の学びをつなぐ『学問のチカラ』」と座談会「大学での学びの魅力」を通じて、高校・大学における学びの魅力を共有した。また、市ヶ谷・多摩・小金井)に通う現役の大学生(卒業生)を招き、キャンパスや学部、大学生活についての講演会を行った。高校3年生は、各学部の大学教員による学部別進路講演会を実施した。生徒にとっては志望する学部の説明を受け、進路を考える貴重な機会となった。また、学部内定後の「3年3学期プログラム」の取り組みでは、テーマごとに研究を行い、プレゼンテーションを実施した。今年度も新型コロナウイルス感染症の影響から、撮影したプレゼン動画を大学教員へ配信し、内容に対して講評をいただいた。さらに、大学入学前オリエンテーションや入学前課題などでも大学と連携して取り組んだ。高校全体に関しては、ワンデー・サイエンス・カレッジ(小金井キャンパス)は、コロナの影響で中止となったものの、多摩キャンパス体験学習プログラムはオンラインで行われた。また、総長杯英語プレゼンテーション大会もオンラインで実施され、本校生徒も受賞するなど活躍がみられた。その他、多摩4学部(経済、社会、現代福祉、スポーツ健康)と三付属校との懇談会が行われ、大学教員と付属校教員との間で、現状と課題の共有はかられた。次年度も、生徒の進路選択を保障する取り組みを具体的に推進し、連携を深め	コロナ禍においてもさまざまな事を行った事を評価する。変わった点を明らかにして、課題を明確にしてほしい。

付属校独自課題

評価基準	学校自己評価				学校関係者評価
	年度目標		年度評価		
	現状と課題	具体的な取組	達成状況	次年度への課題と改善策	
1	入試広報	今年度も「この学校でどのように成長できるか」というストーリーイメージを明確に伝えることをコンセプトとし、より具体的に教科実践を紹介することを軸として広報活動を展開した。昨年度に比べて再開される学外広報イベントが多く、可能な限り参加した。また、時期に応じたテーマを設定し、オンラインを活用した説明会・相談会も展開した。学校説明会については9月の説明会・学校公開をオンライン説明会に変更するなど新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けた面もあったが、10月以降は規模は縮小したものの感染防止の対策をとりながら、実施することができた。入試については、志願者数が中学で微減、高校は増加となった。実施にあたっては新型コロナウイルス感染防止を徹底し、全教職員の協力のもと、無事に終了することができた。結果として適正な選抜方法によって、適正な人数の入学者を確保することができた。今後も本校の教育の中身をより具体的にアピールしていくことが大切となる。その方法については継続的に検討を重ね、積極的に入試広報活動を展開する。	困難中での取り組みを評価する		

2	2021 年度学校構想 (国際交流の推進)	コロナ禍で海外研修の中止が余儀なくされ、海外からの留学生も来日を断念するなど国際交流のとりくみは大きな制約をうけた。このような状況を反映して生徒の国際交流委員会も例年のような活動ができなかった。いっぽう、困難な中でも海外留学をめざす生徒はおり、そのような生徒の支援に努め 10 名以上の生徒が海外留学を果たした。ことは、限られた条件のなかで、一定の成果を得られたと考えられる。 2022 年度にむけ、少しずつ海外渡航の条件が緩和される見通しが見えてきており、研修旅行などは再開していきたい。また、留学生を迎え入れる展望もみえてきており、生徒の委員会の活性化も図りたい。	困難中での取り組みを評価する
---	--------------------------	---	----------------